

辛亥革命

中国近代史における偉大な民主主義革命

吳玉章 著



北京 外文出版社

辛亥革命

中国近代史における偉大な民主主義革命

呉玉章 著

外文出版社
北京

辛 亥 革 命

中国近代史における偉大な民主主義革命

1964年 初版発行

1979年 第二版発行

著 者

吳 玉 章

出 版 者

外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万荘)

発 行 者

中 国 国 際 書 店

(北京 P. O. Box 399)

取 扱 店

東 方 書 店(東京) 亜 東 書 店(東京)

中 国 書 店(福岡) 内 山 書 店(東京)

(株)満 江 紅(東京) 朋 友 書 店(京都)

(株)燎 原 書 店(東京) 中 華 書 店(東京)

編 号 : (日) 11050-29

11-J-525P

00100

再版にあたって

本書は著者の呉玉章氏が生前、辛亥革命（一九一一年十月十日ぼっ発）五十周年を記念して著わしたものである。本社は一九六四年にこの日本語版を刊行した。著者はマルクス・レーニン主義の観点にたち、中国近代史上封建帝制をくつがえしたこの偉大な革命運動を論述している。「わたし自身の思想も、時代思潮の激動にもなつて前進した」と著者自身が思い出のなかで述べているように、著者の初期の思想を反映した個所も若干あるが、当の著者がすでに亡くなっているので、この度の再版にあたって手を加えることはさし控えた。

目次

辛亥革命について……………	1
甲午戦争前後から辛亥革命前後にかけての思い出……………	37
序 詩……………	39
一 甲午戦争の敗北に人心震動……………	43
二 はかなく終わった変法維新……………	49
三 余棟臣の旗あげ 義和団運動……………	58
四 日本渡航……………	68
五 一九〇三年の抗露運動……………	74
六 成城学校に学ぶ……………	81
七 一九〇五年の反米運動……………	87
八 同盟会の結成……………	93
九 「清国と韓国の留日学生取締規則」反対闘争……………	100
一〇 革命派と改良派との闘争……………	107

一一	武装蜂起の失敗	114
一二	雑誌『四川』の創刊	118
一三	暗殺の流行	126
一四	一九一一年四月二十七日の広州蜂起	133
一五	鉄道をまもる闘争のあらし	138
一六	栄県の独立	145
一七	武昌蜂起	152
一八	内江蜂起と重慶蜂起	158
一九	成都政変	162
二〇	南京臨時政府	165
二一	国賊袁世凱 権力をのつとる	172
二二	四川へ帰る	175
二三	第二次革命の失敗 ひきつづき真理を追求する	180
	むすび	185
	著者紹介	187

辛亥革命について

マオツォー
毛沢東同志

毛沢東同志はその名著『新民主主義論』のなかで、太平天国運動①の中国人民がすすめてきた民主主義革命の歴史的意義にふれて、辛亥革命（この革命が起こった一九一一年は旧暦の辛亥の年にあたるため、ふつう辛亥革命とよばれる）は「よりいっそう完全な意味で、この革命の発端となった」とはつきり指摘している。辛亥革命は、中国の民主主義革命の時期における、偉大な歴史的意義をもつ革命であった。この革命は、清朝の支配をくつがえして二千余年にわたる中国の専制君主制度を終わらせ、中華民国を誕生させ、中国人民の民主主義的自覚をたかめ、中国人民の革命闘争を促進させた。

一九世紀の半ばから、中国は曲がりくねった、複雑な転変期に入った。この時期におこった社会、政治、思想上の変化はみな、辛亥革命を生みだした動因であったといえよう。なぜならば、この時期に中国に侵入してきたのはヨーロッパとアメリカの資本主義勢力であったので、重大な社会改革をおこなって自国を資本主義化しないかぎり、中国はこれに対抗できなかったからである。中国最初のブルジョア政治家であった康有為（一八五六一一九二七年）と梁啓超（一

八七三（一九二九年）らは、このような改革を革命以外の方法で、たとえば、日本のように政府が若干の改良を實行するといった方法でもやれると考えていた。だが、清朝政府は外国製の兵器で軍隊を装備し、いくつかの工場をひらいた以外には、一九世紀の末にいたるまで、政治上のどんな改革をうけいれなかった。一八九八年の戊戌政変（ぼじゅう）こそは、清朝政府内部で権力をにぎっていた頑固派が政治改革を拒絶した強硬な意志表示であった。もし、当時の清朝政府が外国の侮りに抵抗し、それを防ぎとめることに断固たる態度を示したなら、清朝政府を支持する者はもっと多かったかもしれない。しかし、この点で清朝政府は無能であったばかりか、まったくゆるし難い無能ぶりをしめた。一八九九年から一九〇〇年にかけて、義和団⑧が外国の侵略に反対する戦いをおこしたとき、清朝政府は、これになんら効果的な援助をあたえなかったばかりか、イギリス、フランス、日本、ロシア、ドイツ、アメリカ、イタリア、オーストリアからなる八カ国連合軍が北京に攻めこんでくると、いちはやく、かれらと屈辱的な「辛丑条約」（しんちゆう）（旧暦の辛丑の年は一九〇一年にあたる）をむすんだ。この条約によって清朝政府は中国における外国の駐兵権をみとめたほかに、賠償金四億五〇〇〇万テール、元利合計九億八〇〇〇万テールという巨額の金を、関税と塩税を抵当として三十九カ年間に分割払いすること、これらの税金の徴収を外国人の監督下におくことを承認した。その結果、中国は帝国主義列強から直接銃剣によるおどかしを

うけたばかりでなく、財政収支にたいするかれらの干渉をもゆるすことになった。こうして中国は半植民地の泥沼にいつそう深く落ちこんでしまったのである。

この条約は、当時の人びとをことのほか憤慨させた。偉大な革命的民主主義者孫中山先生（一八六六―一九二五年）の言うところによれば、それまで、世間の人は革命のために奔走する先生を危険分子とみなして近づこうとしなかったのが、このとき以来たくさんの方々ができ、革命の主張者がますますふえてきたという。なぜ、そのような変化がおこったのか。広はん人びとの愛国心が高まったことが当然大きな原因のひとつであった。しかし、この時期に、孫中山先生の宣伝する民主主義革命が多くの人から共鳴をうけるようになったのは、新しい社会的基礎があったからである。この新しい社会的基礎とは、すなわちブルジョア階級であった。ブルジョア階級は当時の新興階級であって、それが現われたのは、ほぼ一九世紀の八〇年代から九〇年代にかけてのことであるが、二〇世紀のはじめになって、一応ひとつの階級として形をととのえるにいったといつてよい。

このころみに、この時期における民族工業の発展をみてみよう。一九〇〇年いぜん、完全に民間経営の工場、鉦山で、資本金一万元をこえるものは一二二、資本金総額は二二七七万元であったのが、一九〇六年には、一三六にふえ、資本金総額も二七〇〇万元になった。なかでも、とくに

いちじるしい発達をとげたのは綿紡績業であった。一八九六年に、国内の紡績工場一二のうち、中国人経営のものは七、紡錘総数四一万七〇〇〇錘のうち、中国人所有のものは二五万九〇〇〇錘、織機二一〇〇台のうち、中国人所有のものは一七五〇台であった。当時、綿紡績業のもっとも発達した上海と江蘇を例にとると、一九〇二年の上海の紡績工場総数は一七、紡錘総数五六万五〇〇〇錘、一九〇八年の江蘇省の紡績工場総数は二三、紡錘総数五八万七〇〇〇錘、織機総数三〇六六台であった。製糸業の発達もいちじるしかった。一八九五年に上海の製糸工場は全部で一二だったのが、一九〇三年には倍になり、繰糸機は八五二六台を数えた。一九〇九年になると、工場は三五、繰糸機は一万一〇八五台にふえた。さらに二年ごの一九一一年には、工場は四八、繰糸機は一万三七三八台にふえた。そのほか、製粉、マッテ、セメント、タバコ、ガラス、機械製造など各種の企業もおこってきた。

もちろん、これらの資本主義企業の発展は、まだ十分なものではなかった。しかし、そうであったからこそ、ブルジョア階級はその発展をいっそう強く要求し、外国資本の脅威にたいしていっそう敏感になり、政治的改革にたいする関心はいっそう切実になった。鉄道の敷設を例にとってみれば、甲午戦争④まえまでは、中国人は鉄道の敷設がどんなにさし止めた問題であるかを理解していなかった。しかし戦後には、外国人の宣伝があり、自身も気がついて、その重要さを

さとするようになった。そこで、一九世紀の末から二〇世紀のはじめにかけて、大がかりな鉄道敷設がはじまった。しかし、すでに借款で首のまわらなくなっていた清朝政府に、鉄道を敷設するに必要なばく大な資金があるはずもなく、鉄道を敷設しようとすれば外債をつのるほかはなかった。一八九六年、清朝政府は鐵路總公司を設立することに決定し、親米派の大買弁盛宣懷^{セシエンフワン}を總裁に任命した。盛の主張は、「アメリカから金を借り、アメリカの技術者をつかつて」鉄道を敷設するにあつた。そのころ、帝國主義列強は中國で海港の奪取と勢力範圍の爭奪に憂き身をやつしていたから、鉄道敷設への投資はその勢力範圍をかためるいっそう有利な道具となつた。外國の借款で鉄道を敷設するこのやり方は、列強の競争を引きおこしたほか、中國の広はんな人民の反對をまねいた。湖南省^{フンチン}に禹之謨^{ユイチモ}という資本家がいて、長沙^{チャンシャ}の商會會頭、教育會長をつとめていたが、革命黨員とのあいだに關係があつたことを言いがかりにして、一九〇六年の夏、清朝政府はかれを捕え、翌年のはじめに絞首の刑に処した。かれこそ、外債による鉄道敷設に反對したブルジョア階級中の積極的な扇動者で、在職中はもちろんのこと、獄につながれても主張をまげなかつたばかりか、外債による鉄道敷設反對を遺言として死んでいった。

このころ、「利權回收」の叫びが全國いたるところにおこつていた。蘇杭甬^{スワンホンヨウ}鐵道（蘇州^{スウチヨウ}、杭州^{ハンチヨウ}、寧波^{ニンポー}線）の敷設權奪回をめざして勇敢にたたかつた江蘇・浙江省民の勝利は、全國の人民をい

ちだんと勇気づけた。そのほか、当時のブルジョア階級のあいだに大きな波紋をまきおこしたもののとしては、外債による鉱山開発反対の事件があった。山西省^{シヤンシ}では、いちぶの有志がすすんで資金をあつめて、イギリス人の手から採掘権を買いもどした。外債による鉄道の敷設と鉱山の開発に反対する事件は、他の諸省にも続発した。

この時期の愛国運動はまさに爆発寸前の状態にあった。一九〇四年の冬から一九〇五年のはじめにかけて、アメリカが排華的な中米華工条約（中国人労働者排斥を目的として一八九四年に締結された条約）の締結をひきつづき要求したところから、中国のブルジョア階級、小ブルジョア階級は大規模なアメリカ商品のボイコット運動をまきおこし、運動は十いくつかの省の大小都市に波及した。

中国ブルジョア階級は国外にも一部いた。華僑のブルジョア階級がそれである。華僑のブルジョア階級の多くは小商人出身で、なかには労働者出のものさえおり、国内の封建的支配階級とのつながりが比較的よわかった。同時に、かれらは西方のブルジョア文化にふれ、また外国人から差別待遇をうけていたために、清朝政府の無能と腐敗ぶりをひどくうらんでおり、革命的な感情をいだき勝ちであった。

孫中山先生の活動は、そうした華僑のあいだから始まったのである。孫中山先生自身は農民の

家庭に生まれたが、かれの家は純粹な農家ではなかった。先生の兄は、若いときにホノルルへ渡り、牧畜業によって財産を築いた。孫中山先生は幼いとき、その兄にたよってホノルルへゆき、そこで勉強した。だから、先生自身はブルジョア家庭の出身だともいえる。先生が一八九四年につくった革命団体——興中会の会員の七八パーセントは華僑が占め、さらにそのうちの四八パーセントはブルジョア階級であった。先生がのちに沿海の各地でおこなった武装蜂起もみな、華僑の経済上の援助によって支えられたものである。

こうしたことは、あきらかに、ブルジョア階級が政治的改革を要求していたことを物語っている。しかし、ブルジョア階級が唯一の革命的階級ではなかった。そのころ、ブルジョア階級はまだ弱かった。革命派が革命に確信をもてたのは、主として広はん大衆が革命化していたからである。

一九〇三年から一九一一年にかけての中国の社会状態には、外国資本の侵入によってもたらされた重大な影響が現われていた。中国人民の生活水準はもとときわめて低かったにしても、外国資本が中国に侵入するまでは、まだ多くのものは何とかやりくりして生活を維持することができた。たとえば、全国人口の大多数をしめ、小農経済を基礎としていた農民は、ずっと昔から、男が畑をたがやせば女が機^{はた}を織るといった具合に、副業や手工業を兼業して、封建的支配のもと

にきわめて貧しい自給自足の生活をいとなんでいた。また、アヘン戦争（一八四〇～一八四二年）後の一〇～二〇年間は、上海と広州^{クワンチウ}付近の農村における手織綿紡織業の普及ぶりに、外国人は驚かされたものである。だが、一九世紀の末から二〇世紀のはじめになると、農家の手織布にかわって、安価な外国のダンピング製品があらわれはじめた。その他、本来輸出品として重要な地位をしめていた絹織物や磁器なども、このころになると、輸出が減り、輸入がふえて、衰えていった。こうして、農民と手工業者の生きてゆく道がせめられた。それと同時に、清朝政府の徴税と地主の搾取はかえってきびしさを加えたので、かれらの生活はいきおい苦しくなるばかりだった。だから、この時期に農民が「徴税反対」、「米よこせ」などのスローガンをかけて暴動を起こした事件は、年をおってふえるばかりだった。一九〇七年から一九一〇年までのあいだに、揚子江の中流と下流地方でおこった「米騒動」、「徴税反対」事件だけでも八〇件をこえている。一九一〇年、湖南省長沙でおこった米騒動と山東省萊陽^{シャントン ライヤン}県の徴税反対闘争には、いずれも数万人にのぼる大衆が参加した。

中国における資本主義の発達につれて、中国の労働者階級の力もしだいに大きくなってきた。中国の労働者階級は、はやくから革命闘争にくわわっていた。一九〇六年に、同盟会が湖南・江西省境界地区にある萍鄉^{ピンシャン}、瀏陽^{リュウヤン}、醴陵^{リーリン}で武装蜂起をおこしたときに、六〇〇〇余名の安源炭

鉅の労働者がそれにくわわった。一九一一年には、川漢（四川漢口）線の敷設に従事していた労働者は、清朝政府の「鐵道国有」（清朝政府が發布した「鐵道国有」政策は、各省の民間鐵道を強奪して、鐵道敷設権を帝國主義國に売り渡すのが實際のねらいであった）に反対するブルジョア階級の運動に呼応して、暴動をおこした。このほか、労働者は生活条件の改善をめざして、たびたびストライキをおこなった。

こうして世の中が大きく揺れだしたことは、封建社会が日ましにくずれつつあったことの現われであった。このなかで、多数の労働者、農民、手工業者が反抗に立ちあがったばかりでなく、比較的に進歩的ないわゆる開明地主でさえ不安をしめし、經濟上、政治上の活路をもとめようとしたものも少なくなかった。ではどこに活路があるのか。当時、封建主義はまったく行きづまっていた。活路をもとめようとすれば、ブルジョア階級のあとについてゆくほかはなかった。そこで、かれらのなかの多くの者はブルジョア階級の政治運動にまきこまれ、孫中山先生の信徒になるか、さもなければ康有為、梁啓超の信徒になった。

全国人民が日ましにはつきりと革命に傾いていったところから、一九世紀の末から二〇世紀のはじめにかけて、地方的な、規模の小さい革命団体があい前後して誕生した。これらの団体の構成分子は、小ブルジョア階級、ブルジョア階級、比較的進歩的ないわゆる開明地主たちで、出身